

仙台市文化芸術推進基本計画関連シンポジウム

「子どもと文化芸術との出会いをつくる」

— 開催報告 —

仙台市文化芸術推進基本計画関連シンポジウム

子どもと文化芸術との 出会いをつくる



2025年11月15日(土)

13:30~15:30 (開場13:00)

せんだいメディアテーク
1階オープンスクエア

[定員] 100名程度

要申込
参加無料

あそびの場「ダンボール・パーク」を開設します!

ダンボールで自由に遊べて、出入りも
自由な「ダンボール・パーク」が会場内
に出現! 「子どもと一緒に参加したい!」
「途中で休息や気分転換をしたい!」と
いう方もぜひイベントにご参加ください。

協力: 認定NPO法人冒険あそび場
せんだい・みやぎネットワーク



当日のプログラム

1 / 報告

仙台市文化芸術推進基本計画の実施状況について(仙台市)

2 / ゲストスピーチ

「考えてみよう! 子どもにとって豊かな文化環境とは?」

森本 真也子 (特定非営利活動法人 子どもと文化全国フォーラム代表理事)

3 / 座談会 (ゲスト3人と参加者のみなさんとの対話の場)

森本 真也子 (特定非営利活動法人 子どもと文化全国フォーラム代表理事)

千田 祥子 (公益財団法人音楽の力による復興センター・東北 コーディネーター)

齋藤 尚美 (子ども造形アトリエ アートフィールドくうか主宰)



手話通訳あり



途中入退場OK

主催: 仙台市、仙台市教育委員会

1 開催概要

【日 時】	令和7年11月15日(土) 13:30~15:30
【会 場】	せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア
【タイトル】	仙台市文化芸術推進基本計画関連シンポジウム 「こどもと文化芸術との出会いをつくる」
【主 催】	仙台市、仙台市教育委員会
【開催目的】	<ul style="list-style-type: none"> ・「仙台市文化芸術推進基本計画」に基づき、計画の推進に向けたシンポジウムを開催し、計画に掲げる施策の取組み状況を周知するとともに、文化芸術関係者のお話を通じて、市民の方々とともに学び、仙台の文化芸術の課題や今後のあり方等を考える場とする。(計画「第5章 計画の推進」2.進捗管理に基づく取組み) ・アンケートに、当日の感想のほか、市の取組みに対する評価や意見をもらう設問を設け、計画および今後の本市の取組みに生かす。
【実施概要】	<p>(報告)</p> <p>●仙台市文化芸術推進基本計画の実施状況について 仙台市文化振興課長 佐久間 良樹</p> <p>(ゲストスピーチ)</p> <p>●「考えてみよう！こどもにとって豊かな文化環境とは？」 NPO 法人子どもと文化全国フォーラム 代表理事 森本 真也子 氏</p> <p>(座談会)</p> <p>NPO 法人子どもと文化全国フォーラム 代表理事 森本 真也子 氏 (公財)音楽の力による復興センター・東北 コーディネーター 千田 祥子 氏 こども造形アトリエ アートフィールドくうか主宰 斎藤 尚美 氏</p>
【あそびの場】	「ダンボール・パーク」 協力：認定 NPO 法人冒険あそび場せんだい・みやぎネットワーク
【参加者数】	74 人 (シンポジウム・あそびの場 合計)

2 報告

- ・仙台市から仙台市文化芸術推進基本計画の概要についての説明と、シンポジウムのテーマである子どもの文化芸術に触れる機会の充実に向けた取組みについて報告した。

テーマ：仙台市文化芸術推進基本計画の実施状況について

登壇者：仙台市文化振興課長 佐久間 良樹

仙台市文化芸術推進基本計画の取り組み状況について

令和7年11月15日
文化観光局



(内容)

- ・仙台市では、令和6年3月にこれからの本市の文化芸術振興の方向性を示す「仙台市文化芸術推進基本計画」を策定し、本日のシンポジウムは、本計画に基づく取組みの一環として開催している。
- ・計画では、本市が文化芸術面で目指す5つの姿を掲げており、この実現に向けて11の基本施策を展開し、取組みを進めており、今回のシンポジウムのテーマと特に関係の深いものとして、目指す姿として3番目の「子どものときから文化芸術との出会いがあり、若者のチャレンジを応援するまち」を掲げ、そこに位置づける基本施策の1つとして「⑤子どもの文化芸術に親しむ機会の充実」を掲げている。
- ・さらに、目指す姿の実現に向けて重点的に取り組む4つの重点プロジェクトを掲げており、その1つとして、「創造性をひらく 子ども・若者プロジェクト」がある。
- ・本市では、この計画に基づき、子どもの文化芸術体験の充実に向けた様々な取組みを実施しており、重点プロジェクトに位置づける取組みや、その他基本施策に基づく取組みについて、主なものを紹介する。(以下、箇条書き)
 - 学校、保育所等へアーティストを派遣する取組み
(令和7年度は学校41校、未就学児施設43園を対象に実施予定。)
 - 舞台芸術等の鑑賞・体験機会の創出
(例：仙台ジュニアオーケストラ、青少年のためのオーケストラ鑑賞会、
子ども文学館えほんのひろば、ダンスのいりぐちプログラム)
 - 伝統文化等の体験や学びの機会の創出にかかる取組み
(例：せんだい技フェス、子どものための能講座)
 - 音楽ホールの開館を見据えた取組み
(例：青葉山おんがくひろば)
- ・子どもの頃から多くの文化芸術に触れるることは、豊かな感性を育むとともに、生涯にわたる生きがいを生み出し、また文化芸術の将来の担い手を育てることにつながる。

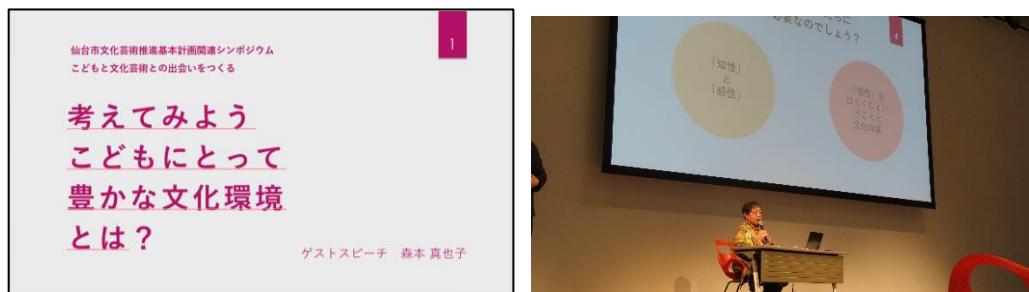
- ・今後も本市の文化芸術推進基本計画に基づき、次世代を担うこどもたちが、社会的・経済的な環境に関わらず等しく文化芸術に触れる機会を得られるよう、多様な主体と連携し、アウトリーチの取組みも推進しながら、こどもたちが文化芸術に出会い、親しむ機会のさらなる充実を図っていく。

3 ゲストスピーチ

- ・本市の計画に関する取組みについて評価をいただくとともに、現在のこどもたちが置かれている状況を踏まえ、なぜ文化体験が必要なのかについて、講演された。

テーマ：「考えてみよう！こどもにとって豊かな文化環境とは？」

登壇者：N P O 法人子どもと文化全国フォーラム代表理事 森本 真也子 氏



(内容)

1 自己紹介と活動の経緯

- ・子どもと文化全国フォーラム代表理事として、日本のかどもたちが文化権を保障された社会を目指して活動している。
- ・地域コーディネーター協会理事として、こどもが地域で文化に出会える仕組みづくりを推進。こどもは自分で文化にアクセスできないため、地域と文化をつなぐ人材の必要性を痛感し、協会を設立した。
- ・「子どもと舞台芸術大博覧会実行委員会」の事務局長を務め、仙台での開催経験もある。仙台の地域団体との交流を通じ、その活動に感銘を受けた。
- ・いま暮らしている青梅市では長年文化活動を継続。人口は仙台の約 10 分の 1 で、地域密着型の活動を展開。青梅市協働事業市民推進委員会の委員長を務め、協働の仕組みを学びながら実践している。
- ・青梅市文化交流センターで生涯学習コーディネーターとして活動。このセンターは市民会館の閉館後、建てられたもの。市民会館時代に長く所属していた職員の方がコーディネーター的役割を担っていたことから、新センターにもそういう人がいてほしいという声があがり、コーディネーター制度を導入し、4名を配置している。
- ・このコーディネーターとしての活動も 6 年経ったが、文化活動は高齢者が支えている現状を実感している。毎日のように活発に団体として活動している一方で、団体間の交流が乏しく、各分野が孤立している状況があったので、異なる文化体験も進めて

おり、参加者の姿から良い変化を感じる。

- ・青梅市の新しい市民ホール建設計画において、コーディネーター制度の継続が共通認識となっていることは、一つの仕事ができたと思っている。

2 仙台市の取組みについて

- ・文化計画の冒頭は一般的な文化条文の記述が多いが、仙台市の計画本文には「基本計画の目的」「社会情勢」「仙台市をどんな街にしたいか」という方向性が豊かに書かれており、文化の指針として非常に重要だと感じた。
- ・文化は文化単独で発展するものではなく、町の豊かさや人々の幸せのために文化があると考えているため、それが示されている点を評価したい。
- ・計画の中に「子どもの問題」が含まれていることも重要であると感じた。
- ・文化体験が豊富にあるということを目指していく計画というのはとても大事ではあるが、単に多数の事業があれば良いということなのか？という部分については、さらに考える必要があると感じた。

3 文化体験は子どもたちにどうして必要か

- ・子どもが育つことの中で、知性と感性という言葉が使われるが、知性だけを教えるのであれば、学校の先生は必要なくなるのではと言われるくらい、今、知識や記憶だけでは、人間は本当に豊かに生きられない時代に向かっていくというのは、みなさん実感しているところではないか。
- ・先日、厚生労働省主催の共生社会のためのまちづくりの勉強会に参加した際、共生社会をつくるということは、お互いが顔を見たら挨拶をし合い、共感をし合う地域をどうやったらつくれるか…ということだという話だった。このためには、他者の気持ちを想像する力が不可欠である。
- ・子どもに培ってほしいのは「できる・できない」ではなく「自分がいま感じていることは何なのか」「自分は今こう感じている」という感覚で、そのために感性を育むこととして、文化体験をして欲しいと思っている。
- ・自分たちがこれだけ色々な文化体験を子どもたちにさせたいと思っている理由として、よく使う表現として「食べたことのないものは食べたいと思わない」という言葉がある。
- ・自分は子どもの頃にマンゴーを食べたことがなかったので、マンゴーを食べたいと思うことはなかった。これは文化体験も同じで、楽しい体験、音楽で感動したとか、みんなで歌って嬉しかったとか、そういう経験がなければ欲求は生まれない。
- ・このような体験への欲求を子どもたちに持つてもらうには、極端なことを言うと、小学校中学年までに、大人たちが必ず多様な体験を保障することが必要で、そのためには国や自治体が責任を持って仕組みを整えるべき。公共として、子どもたちにこういった体験が必要だということを発信すべきではないか。

4 子どもたちにとって豊かな文化環境とは？

(1) 文化体験にいつでも手軽にアクセスできる環境

- ・先ほど話したように、体験をしたことがなければやりたいと思うきっかけがないた

め、いつでも、どこでも、無料で手軽に文化体験にアクセスできる環境が学校や家庭や地域で必要である。

- ・学校だけでは、子どもがどんな体験をしたかを親が知ることができず、親子の間に共通体験を生むことができない。そういう意味で、学校に限らず、地域・家庭・親子・近隣を巻き込んだ共通体験がもてるような、文化体験の場がたくさんあると良いと思う。
- ・いまは、文化的な体験（ピアノを習っている、みんなと歌う機会がある等）の機会があるということもと、そうでない子どもの間には大きな格差がある。体験している子どもの方が少なく、これがなぜかというと、親世代の体験不足が悪循環を生んでいる。
- ・文化体験の機会をもたなかつた親は、子どもにも体験させようとは思はないので、どんどん体験の格差が拡大している。
- ・安価で手軽な文化体験の場を提供する場合にも、専門家や指導者がいないと文化体験は成立しない。

（2）自分の気持ちを表現することが、日常生活の中で保障されていること

- ・近年は、子どもの遊びが極端に減少。「鬼ごっこ」のような単純な遊びが主流で、「だるまさんがころんだ」「陣取り」などのルールある遊びができず、遊びの工夫や過程を楽しむ力が失われている。こういった状況をどう変えていかなければならないかは、私たちが考えていかなければならぬこと。
- ・遊びの手前に、遊ぶということの基本は表現するということ、喋る・自分が思っていることを人に伝える、自分の気持ちを表現していくことが必要。
- ・いまの子どもたちは、どんなことをしたいとか、表現することが本当に少ない。これは、何かをしたいと言ったとき、大人にダメと言われたり、そもそもやることが決まっていたりすることが影響している。
- ・子どもの権利条約第31条「休息余暇の権利」というものがある、これは自分の裁量で時間を使える権利が保障されているということ。ところが、子どもたちにはこの休息余暇の時間というものが、ほとんどない。意味のある活動ばかりで、自分の気持ちを話し合う機会が不足している。
- ・そんな状況の子どもたちに、気持ちを表現できるようになってほしいと思うので、楽しいことを色々と仕掛けようとするし、一緒に活動をしたいが、自分自身がやりたいということが何かわからないという子どもも多い。周りの子どもに聞いてみてほしいが、多くの子どもが「何をしたい？」と聞いても「べつに」と答える現状。そういう空気にしてしまっている。

（3）文化環境は、日々のくらしや、毎日の生活が文化豊かであること

- ・このような子どもたちの状況から、一生懸命大人たちは子どもが面白いと思うイベントをしかけていて、イベントごとをたくさん行っている。しかし、子どもにとって豊かな文化環境は、イベントだけでは不十分。
- ・体験をして、「すごいことがあった」「楽しかった」という体験があり、それを日常の暮らしの中でかみしめる時間が需要。→「ハレの日」だけでなく「ケの日」の日常が重要。
- ・このことが、今の子どもたちに本当に少なくなっている。これは、大人も子どもも忙

しく、ゆったりした日常が失われている。

- ・40 年前と比べて、子どもの生活の中から消えたものとして、「お手伝いの時間」「遊びの時間（決めて遊ぶ時間がなく、ゲームの合間に遊ぶだけ）」「家族団欒の時間（離婚率の上昇や生活の変化で減少）」の 3 つがある。
- ・コロナ禍で「誰ともつながらない時間」がさらに増加。家族や地域でのなごむ時間が不足し、孤立感が広がっている。

5 日本のこどもたちの現状

- ・日本は「子どもの自殺が多い国」として世界で知られている。国際的な児童青少年演劇の連盟の世界大会の場で他国の方々から「なぜ日本のかどもは自殺するのか」と質問された経験があった。
- ・実際、子どもの自殺は年々増加し、過去最多となっている。2024 年の自殺者は全体でみると減少したが、こどもは増加した。
- ・自殺の原因について、学校問題やいじめの問題を浮かべる方も多いと思うが、原因は「わからない」が最多。SOS を出せない子どもが多い。
- ・背景にある問題として、中高生や思春期の若者に聞くと、「正しくなくてはいけない」という空気があり、「ちゃんとしたことと言わないといけない」というプレッシャーから、意見を言えず苦しむこどもたちの姿が見える。
- ・人はそれぞれ思ったことを言って良いという空気が、日本のなかにどんどんなくなってきていて、こどもも大人も日本社会全体で孤独・孤立が進行している。
- ・昔は季節の行事や地域の交流があったが、今は減少。その反映として「こども食堂」が急増（全国で約 1 万 5 千か所、小学校区に 1 か所レベル）。

6 豊かな文化環境とは

- ・大きなイベントだけでなく、日常の中で人と人がつながること。そういった日常があることが、本当はこどもにとって豊かな文化環境なのではないか。近所で「お茶飲みに来ない？」「一緒に遊ぼう」「折り紙やろう」など、気軽な交流が文化活動になる。
- ・小さなイベントや昔遊び、料理、折り紙など、生活に潤いを与える活動を誰でもやってみることが重要。それが文化活動の醍醐味で、良さである。
- ・文化には人と人を心豊かにつなぐ力があるということは、文化活動を実践したり、関心がある人は分かっていること。
- ・大きな活動でも小さな活動でもよい。身近な範囲で子どもや地域と文化を作り合うことが、文化環境を豊かにする。行政・民間が協力し、財力や人材を確保して、こうした仕組みを支えることが必要。

4 座談会

・ゲストスピーカーと地元の実践者2名の計3名で、参加者からの質問も交えながら意見交換を行った。

〈登壇者〉 ※進行

NPO 法人子どもと文化全国フォーラム 代表理事 森本 真也子 氏 ※

(公財) 音楽の力による復興センター・東北 コーディネーター 千田 祥子 氏

こども造形アトリエ アートフィールドくうか主宰 斎藤 尚美 氏



以下、敬称略

《　》進行

【　】発言者

(内容)

《森本》

この座談会では、仙台をはじめとする地域で文化芸術に取り組まれている実践者の皆さんとともに、こどもたちが文化芸術に触れる場の現状や課題、そして課題解決に向けたヒントや今後の展望について意見交換を行えていたらと思う。それでは千田さんと斎藤さんから、自己紹介と先程の話の感想をいただきたい。

【千田】

公益財団法人音楽の力による復興センター・東北でコーディネーターを務めている。以前は公共ホールで11年間、自主事業の企画を担当していた。現在は主としてクラシックのプロ音楽家とともに、さまざまな場所へコンサートを届ける活動を行っている。

森本さんのお話はどれも心に残り、特に「文化体験はハレの日だけでは成り立たず、ケの日の生活が不可欠である」という点に深く共感した。ハレの日の体験を持ち帰った後、日常の場で大人がどのように受け止めるか、そしてこどもが自発的に体験を自分のものとして熟成させ、表現へつなげていく過程が大切だと、私たちも常々考えているところ。

最後に触れられた「子どもの自殺」の話題も、世界に出た際の日本の見られ方を改めて意識するものだった。

【斎藤】

仙台市内で「アートフィールドくうか」という名称で、三か所の会場にてこども造形教室を運営している。教室は習い事の一環だが、全国展開の「あそびの学校」(ショッピングセン

ター内で無料の造形を提供）にも 18 歳から携わり、35 年間続けてきた。近年は仙台市内の保育所からの依頼が増え、現在は 15 か所の保育園で造形活動を行っている。民間とのコラボによる季節イベントなども、公的施設も含め参加しやすい形で実施している。

森本先生のお話はすべて傾きながら拝聴した。特に「あそびがない」という問題は私自身にとっても大きなテーマで、私は幼少期の豊かな遊びの記憶が、今の生きる糧になっていると実感しているところ。あそびの記憶が乏しい子どもたちが、大人になったときにどうなるのかを心配している。私たちはその「あそび」の中に文化芸術をつなぎ、コーディネートしている。本日は、皆さまから学びつつお話をさせていただきたい。

《森本》

ハレとケの話など、力を込みたいところを言っていただき、ありがたい。では、お二人の現場での取り組み、感じている現状と課題について、まずは千田さんからお伺いしたい。

【千田】

- ・私の所属する（公財）音楽の力による復興センター・東北は、東日本大震災の 2 週間後に仙台フィルハーモニー管弦楽団と市民有志により設立され、仙台フィル団員だけでなく、フリーランスの音楽家も含め、現在も約 100 名の方々にご協力いただいている。センターにはコーディネーターのみが在籍。
- ・仙台フィルのスクールコンサートや「第九」演奏会でのご縁を基に、震災後、岩手・宮城・福島の学校や避難所に少人数のアンサンブルで「復興コンサート」を届けた。曲目はクラシックのみならず多様で、こどもたちの笑顔や歌声に演奏者が元気をもらう日々だった。
- ・防災集団移転団地の町内会長から「子育て世代の住民同士が知り合うきっかけがない」との相談を受け、そこで、同じ音楽家が継続的に通う乳幼児親子向けの音楽あそびを企画。生演奏に触れられる楽しさ、世代間交流の場として好評で、継続的訪問は子どもの興味の把握やアイデアの試行に有益だった。
- ・文化庁の「芸術家の派遣事業」には震災復興支援対応の枠が設けられ、現在も継続している。仙台に拠点を置くジャンルの異なる 3 団体がコーディネートを行い、こどもたちのもとへアーティストが出向く機会が格段に増えた。令和 5 年度からは対象年齢が小学校以上に限定されたが、仙台市では多い時で 187 件の実施があり、その半数以上が未就学児施設だった。このため、仙台市・宮城県で未就学児対象の新たなアウトリーチ事業が始まっている。
- ・今年 6 月の実施校募集時のプログラム・カタログは計 43 プログラムとなり、落語家・講談師以外はほぼ仙台・宮城在住の出演者。最大の良さはアーティストとの距離の近さ。弦楽器の素材当てクイズや、こどもたちの中に入って演奏するなど、緊張がほぐれ、最前列の子どもがドレスに手が届くほど近づいた場面が印象的だった。人は耳だけで音楽を聞くのではなく、五感を総動員して演奏家のパフォーマンスを受け止め、態度で気持ちを返してくれるのだと実感したところ。ベテランの仙台フィル楽団員による体験指導も好評で、指揮者体験など少人数ならではの濃い体験を提供できた。
- ・昨年度から新しい複合施設整備に向けたプレ事業を受託し、今年 6 月には「せんだいこども食堂」でウクレレ合奏にこどもたちが参加した。コンサートに出かける機会が少ないこどもたちへ音楽との出会いを届ける意義は大きいと感じている。親子で音楽に親しめる

コンサートや体験型ワークショップ、役者・バレエダンサーとのコラボ、楽器体験なども企画している。「青葉山おんがくひろば」は今年度も開始し、11/28 の「ギターとチェロと、にんぎょうげき！」午後の回を受付中。

- ・仙台では近年、子どもに音楽を届ける活動が増えている。

「音楽のおもちゃ箱」：子どもも障害のある人も一緒に楽しめるコンサートを多数開催。

「きょうゆうプロジェクト」：プロ音楽家と医療従事者・医学生が化学や医学と音楽を組み合わせた「学べる音楽会」等を企画。宮城県立こども病院や支援学校で演奏会を実施し、音楽の力の科学的研究にも取り組んでいる。

また、演奏家自身の企画による親子向けコンサートのチラシを見かける機会も増えた。

- ・課題は以下のとおり。

①財源の確保：継続的な活動ができない。こどもたちの「またきてね！」に応えられない

②関係性の維持：単発実施では施設や先生方との関係を構築しにくい。

③評価のむずかしさ：子供たちの内面の変化は、その場ですぐに測れるものではない。アウトリーチやワークショップを「数字」で評価することの限界。

④長期的視点での人材育成：アーティストも、コーディネーターも、トライ＆エラーができる場を。

⑤アーティストに敬意を！：アーティストも一市民、一生活者。適切な報酬を。

《森本》

後ほどまた伺いたい。続いて齋藤さん、お願いする。

【齋藤】

- ・本部は青葉区柏木にあり、小さなテナントを借りて活動している。1クラス 10～15人、対象は2歳から小学校6年生までだが、やめたくない中高生も通い続けている。絵だけではなく、各種粘土、工作、木工、染め物、織物、羊毛フェルト、タイルモザイクなど、幅広いカリキュラムが自慢。素材も多様で、着地点のある「これを作りましょう」ではなく、材料を用意し「自由につくる」ことが多いのが特徴。自由制作が苦手な子もあるが、通っているこどもたちは慣れており、自由に作ることを楽しんでいる。週1クラスと月1クラスの二本立てで、こどもの習い事の一コマとして活動している。
- ・子どもの習い事の優先順位は、プログラミング、塾、ピアノ、そしてアートは最下位になります。英語や塾、ピアノは「宿題や練習をしてから来てください」が多い一方、アートは「何もしないで来ていい」習い事なので、子どもたちは身軽に楽しみにして通ってくれている。
- ・私が造形教室を始めたきっかけは、幼少期の体験から。1980年度頃、近所に文庫があり、私は鍵っ子で、両親が帰るまで文庫で過ごし、書籍に囲まれた部屋で文庫のおばちゃんが工作や折り紙、塗り絵、絵などを教えてくれた。上級の子が下級の子に教えるコミュニティも自然に生まれていて、児童館がない時代、その場所が安心して過ごせる「居場所」だった。
- ・現在の教室も習い事でありながら、それ以上に「居場所」として通う子が多い。ものづくりをしながら、学校の悩みや相談を受けつつ制作している。学校を休んでもアトリエは休まず来るほど好きな場所として存在しており、スタッフもわが子のようにかわいがりな

がら活動している。

- ・アトリエは25年の歴史があり、最初は1クラスだった障害児アートクラスも、いまは4クラス開設している。私が始めますと言って始めたわけではなく、出会ったお母さんからの要望がきっかけ。親戚に障害のある方がいることや、大学の卒論で障害児の作品を取材した経験もあり、抵抗感はなかった。最初は4歳だった子が現在は三十路になった。いま4クラスとなったのも、お母さんたちの声に応えて増やしたもので、需要が増えていると感じる。
- ・入れる子は一般クラスにも参加し、重度で一緒に作れない子は別クラスで制作している。最近のテーマでは「点描画」を行い、特に自閉症やダウン症の子が集中して秋の味覚（野菜）を点で描いた。
- ・近年、保育所からの依頼が増え、アトリエの活動がない、午前中に訪問している。待機児童問題から一転して定員割れが生じ、保育所間の競争が激しくなり、特色形成のためにアート・サッカー・英語など専門家を呼ぶ園が増えている。現場の先生と相談し、季節や素材と絡めた活動を行います。例として、散歩で拾った松ぼっくりなど自然素材と持参材料を組み合わせた「秋のライトカバー」を、年少から年長まで取り組める簡便なカリキュラムに落とし込んだ。
- ・指導者向け研修の要望も増加している。絵の具の専門的な使い方や粘土の種類などについて話すだけでなく、必ず実技を取り入れる。先生方自身が制作を楽しみ、「楽しかった」と心から思える経験が、こどもへの伝達につながるからである。森本先生が指摘された通り、保護者の経験が乏しいと子どもの経験も乏しくなりがち。専門家として任せはあるが、家庭でも実践してほしいため、活動の持ち帰りが可能な形に落とし込み、保護者へ具体的に伝える役割（親教育・親育て）を重視しているが、なかなか難しい。お母さんたちは忙しく、アトリエでやったのだから、家ではきれいに過ごそうねとなってしまう家庭も多い。
- ・35年間続けている「造形ひろば あそびの学校」は、千葉県の先生がショッピングセンター内に遊び場を作ったことから始まった。週末に家族が必ず訪れる場所に、ふらっと入れる楽しい場があればと全国で展開している。私は宮城県担当で、本部が仙台にあった時期はカリキュラム担当として登録し、全国の教材を開発した。オリジナル教材はアトリエと真逆で、月謝を支払うアトリエでは体験格差が生じるが、ショッピングセンター等の公共の場での参加は誰でも可能。
- ・コンセプトは「親子参加」。親子が一緒に作る機会は少ないため、親子・隣の家族・グループ間のコミュニティが生まれる。最後にお互いに制作物を紹介し合うと、子どもたちが非常に喜ぶ姿が見られる。祖父母も参加可能で、35年続けると、かつて教えた子が親になり、その祖母が孫を連れて参加するなど、世代を超えた活動になっている。生活圏に大規模ショッピングセンターができると生活が変わるが、そこに「ほっとできる、何を作つてもよい場所」があると良いと考えている。

《森本》

お二人とも財源確保の課題を挙げられていましたので、後でまとめて伺いたい。千田さん、課題の5つ目として挙げられていた点をもう一度教えていただきたい。

【千田】

アーティストやコーディネーターへの評価・報酬の低さが若手育成に直結。時間単価換算では準備・投資が考慮されにくい点である。文化庁の芸術家派遣事業を14年続けており、各プログラムは経験を重ねて磨かれてきたが、報酬が一律で決まっている点は、コーディネーターとしても心苦しく感じる。

《森本》

- ・文化庁からの予算に関する話については、講師謝金が低すぎて、専門家をこのような扱いで良いのかと憤りを覚える部分。これでは日本の文化は豊かにならない。
財政面では助成金に頼る団体が多いが、佐藤信さん（黒テント等で活躍）から「助成金に頼るな。今は企業に頼れ」と助言を受けた。自分たちの活動の意義を言語化して発信し、企業が社会を豊かにするために果たすべき役割としてアプローチすることが重要。寄付型NPOで年間何十億も寄付を集める例もあり、発信・言語化・事例提示を絶え間なく行っている。
- ・評価の難しさについては、定性的評価の工夫が必要。例えば、ワークショップ前後でアンケートを取り、参加前は「楽しみではない」「面倒」と答えた子が、参加後に評価が上がることは共通して見られる。その変化や子どもの言葉を一つひとつ拾い、自己評価・他者評価につながる言葉を報告書に記載する。人数だけではなく、具体的な変化を「文化活動が自己肯定感を高める」証として示すことができる。
- ・報酬については、独自事業では一定額を必ず支払う方針にした。文化庁の額より高く支払い、その価値を尊重すると、アーティスト側からも「工夫をするので同額で2回やってもよい」といった提案が生まれ、互いに高め合う関係が築かれる。
- ・斎藤さんのスタッフ体制について、給与や手当はどのように捻出しているか。

【斎藤】

アトリエは月謝収入で收支を運営し、赤字にならない範囲で維持している。私は家族がいるが扶養には入っておらず、個人事業主としてフリーランスで活動している。スタッフはアルバイトの時給制で、アーティストや専門学校勤務等の兼業が多い。

《森本》

- ・多くの方が制作者とアーティストの両方を担い、生業を作っているが、両立には無理が生じる場合がある。良いアーティストや良いコーディネーターを生み、支えるための仕組みが必要。近隣の民間ファンドや地域のサポーターを頼る方法もある。
- ・例として、私の小学校区の祭りで、舞台公演を無料で見せるために「サポーター券」を発行し、毎年約15万円が集まるようになった。これでそれなりのパフォーマーを呼べる。さらに、昼食のパンを買えない子どもの支援として無料の焼きそば配布の資金も集めた。最初は批判もあったが、まちの人々が「子どもへのプレゼント」として支援する文化が育った。市民ファンドとしての挑戦は意義がある。
- ・公的予算が出ることが最善だが、できない場合に市民がここまでやれるという姿を示すことも必要。事務局では社会保険と適正な給与を死守してきたが、苦しくなる局面もあった。だからこそ、企業・市民・社会の力を頼る時期に来ていると感じる。新潟では越乃寒梅な

- ど酒蔵の協力も得た。現物支援も含め、必要だと市民が思うことを実現していく形が大切。
- ・加えて、実演家と子どもを出会わせる意味は、すごい才能や美しい音に触れられるということだけではない。「世の中にこんな人がいる」という多様な存在を知らせ、子どもが「自分もそれでいい」と気を楽にできることが重要。
 - ・話過ぎてしまったが、次は今後の展望やアイデアについて聞いていきたい。

【千田】

- ・子どもが文化芸術に出会うために必要なのは「場」以上に、親や周囲の大人の意識。先入観のない時期は長くはなく、小さいうちから、美しい音やもの、魅力的な大人との出会いなど、心が動く経験を多くさせてほしい。場については、身近にアートがある環境と、アートの場に行きやすくなるきっかけの両方が必要。
- ・オープンスクエアでのコンサートは開放感があったが、音や視線が多く集中しづらい面もある。窮屈ではなく広々としていたながら、ほどよく閉じられた空間で音に包まれる感覚を持てる場が、まちの中心やショッピングセンター内にあると良いと考える。

《森本》

- ・地域資源（人・場所・もの）を見る化し、シンボル的な場所にはそれにふさわしい活動を。子どもが行きやすい場所が望ましいが、わざわざ行く価値のあるシンボルなら行き方の工夫をするようになる。日常で一緒にいる友達と体験を共有し、「あれ見たよね」と語り合える関係性の変化が重要。アンケートでも「音楽が素敵だった」より「友だちができた」という言葉が何よりも大切な財産であると我々は考えるべきだ、と思っている。
- ・先ほど、斎藤さんのお話の中で居場所という言葉があったが、居場所は一つでなく、いくつあっても良い。母親向けの「出張体験会」を企画し、子どもが楽しんでいる活動を保護者自身も体験できる機会をつくってはどうか。家庭や近所で再現する際の工夫も具体的に伝えるとよいかもしれません。

【斎藤】

興味のある保護者はアトリエに集まってやるときもあるが、それ以外の保護者も巻き込むのも良いですね。

《森本》

興味が薄い人ほど、こちらから声をかけ、得意な場（お茶でもお酒でも）で集まり、「こんなことをやってみませんか」と誘う。そうしなければ広がらない。
斎藤さんからも今後の展望など伺いたい。

【斎藤】

- ・仙台市においては、美術館などの美術の基盤整備が充実すると良いという夢がある。新たにできる「あそび場」に工作室が備わると聞いているが、絵具を思い切り使える部屋、木工に特化した部屋など、アート内の多様分野に対応できる環境があると良い。専任の作家が教える時間があり、市民が平等にアクセスできれば、保護者も連れて行きやすく、専門家の役割も活かせる。

- ・「アート的思考」と言われるが、アートは答えがない世界。答えのある暮らしに慣れた子どもにとっては難解に感じることもあるが、答えのない世界を体験できる自由な空間が、AIに置き換えられない人間の力を育てると思う。

『森本』

今の話から「答えのないアートのバス」を思いついた。材料を積んで仙台中を回る移動型の創作バス。妄想だが。

【齋藤】

とても良いと思う。

『森本』

ではここで、会場からの質疑応答に移りたいと思う。

【質問者1】

- ・先日、宮城県内で開催される造形教育研究大会に参加し、小学校・中学校の先生方による授業実践を視察した。そこで展開されている授業は非常に質が高く、こどもたちが嬉々として学ぶ様子が見られた。
- ・しかし、こうした優れた授業は一部の学校に限られており、学校間で芸術教育の機会や質に大きな格差があると感じている。指導者不足が主な要因であり、音楽教育においても同様の課題が見られる。例えば、NHK 合唱コンクールに参加している宮城県内の小学校は現在わずか3校。戦前には仙台市の多くの学校が参加していた歴史があるにもかかわらず、現在は指導できる教員が不足し、合唱コンクール自体がほとんど行われていない。結果として、こどもたちが音楽に触れる機会は非常に限られてしまっている。
- ・仙台市の文化芸術関連事業を見ても、スポット的なプロジェクトを中心であり、学校教育の基盤整備には十分つながっていないように思われる。森本先生が指摘された「地域との連携」も重要だが、学校教育の中で音楽や美術の授業を充実させることが不可欠。すべてのこどもが芸術に触れられる環境を整えることは、教育の質を高めるうえで非常に重要である。そこで、行政としてこの現状をどのように認識し、どのような改善策を検討しているのかを伺いたい。

【仙台市】

- ・教育委員会を飛び越えてお答えするのは差し出がましい部分もあるが、現状についてお伝えしたい。学校教育の詳細については私もすべて把握しているわけではないが、部活動に関しては、現在文部科学省を中心に部活動の地域移行・地域展開が大きな課題となっている。
- ・少子化の進行により、学校単位での部活動の維持が難しくなっていることに加え、教員の働き方改革の影響もあり、従来のように学校だけで部活動を運営することが困難になっている。しかし、こどもたちに文化活動やスポーツ活動の体験機会を確保することは重要である。そのため、まずは休日の部活動をどうするかという点で、地域のスポーツクラブや文化芸術団体に部活動を展開していく方向で議論が進められている。

- ・仙台市教育委員会でもこの課題に取り組んでいるが、市内には約 200 校の小中学校があり、指導者をどのように確保するかが非常に大きな課題。すぐに全面的な移行を進めるのは難しい状況だが、地域と連携しながら、こどもたちの芸術活動の環境を整えていく必要がある。

【質問者 1】

- ・工作室などの専門施設が各学校に整備され、そこに必ず専門の先生が配置されている状況であれば、不登校のこどもにとっても安心して通える場になる可能性がある。こうした環境は、こどもたちが自然に音楽や美術に触れられる機会を提供するうえで非常に重要。
- ・一方で、現在はスポット的な鑑賞会やイベントが中心となっており、それらを見て感動し、アーティストを目指すこどもが生まれることははあるかもしれないが、文化を根付かせるためには、日常的に美術館に行く、コンサートを聴くといった体験ができる大人を育てることが不可欠。そのためには、小学校や中学校の段階から、絵を描いたり歌を歌ったりできる環境を常に整えておくことが重要。
- ・仙台市が文化都市を標榜するのであれば、キャッチフレーズだけでなく、具体的な施策に落としこみ、実効性のある取り組みを進める必要がある。現状では、キャッチフレーズづくりは得意であるものの、実際の施策への反映が十分ではない印象がある。文化都市を実現するためには、効果的な予算配分を行い、学校における芸術環境の整備に力を入れることが不可欠。

【質問者 2】

- ・感想を述べさせていただく。先ほどの方のお話は非常に重要であり、森本氏の先ほどのご意見とも共通する点がある。それは、こどもと文化芸術の出会いは、大人の不断の努力なしには継続できないということ。なぜなら、経済活動の中で文化芸術はどうしても軽視されがちだから。
- ・今年、私の所属する一般社団法人では仙台市と協働し、アウトリーチ活動をどう維持するかという事業を進めている。そのコーディネーター研修に参加した中学校の先生から、「中学校で文化祭がなくなった」という話を聞いた。理由は、夏の猛暑でイベントが難しく、秋には体育祭を優先したため文化祭が削られたというもの。このように、学校の中で文化的な活動が失われる傾向が見られる。
- ・さらに、コロナ禍では「歌ってはいけない」など、人と一緒に行う文化的活動が制限され、世界が灰色になったような状況があった。こうした背景を踏まえると、地域や社会に開いていく取り組みも重要だが、学校というセーフティーネットの中で文化芸術との出会いをどう維持するかが極めて大切。学校での文化活動の場を確保し続けることが、こどもたちにとって不可欠な機会を生むことになる。

《森本》

ありがとうございました。時間が過ぎているが、最後にひとことずつ話して終わりとしたい。

【千田】

さきほどのお話を聞きながら、保健室登校じゃなくて、美術室登校、図書室登校というのが

もしかしたらあるんじゃないかなと思った。色々な居場所の作り方で、ハレの日を届ける立場ではあるが、ケの日常に持ち帰られるようにというところまで考えながら、活動していきたい。ありがとうございました。

【齋藤】

・私もお話を聞いて、自分が保育園に行っているお仕事も、先生たちが実際に現場で造形活動に関わる時間とか、持てないということで借り出されているという部分もあるので、小中学校の美術の先生であっても、なかなかそこまで追いつかない状況があると、専任のサポートのコーディネーターであったり、そういう方だったりが学校に飛び込んで行って、こどもたちと面白いことやるっていうのもすごく良いと思う。なかなか計画してから実行するまで時間がかかると思うが。あとは今日全体を通して、今来ているこどもたちに対して、関わる責任が重大だと感じたところ。普段は冗談を言いながらやりとりをしていて、冗談も、最近通じない子も多いけれども、こどもの上をいかないと、負けちゃうので。そういう大人でありたいなど、改めて思った。今日来てくださっている方も含め、仙台でもそういった方が増えて、文化芸術が本当に盛んになっていくといいなと思う。ありがとうございました。

《森本》

・私が「地域で」という言葉を繰り返し使っているのは、学校がすでに限界に近いほど多忙であり、学校自身の負担の大きさを強く感じているから。学校という場所を地域の人々が活用し、文化活動を展開することも一つの方法ではないかと考えている。

・現状では、音楽や美術の先生方は教育委員会の仕組みの中で存在が見えにくく、十分に評価されていない印象がある。文化担当課としては、文化計画の中に「子どもの文化」という視点がある以上、学校の文化に関心を持つ先生方に積極的に働きかけ、協力を促す必要があると感じている。

・本来、文化は学校から始まっていた。戦後すぐに始まった「つづり方教室」は、自分の思いを言語化する場であり、そこから文化が学校を中心に広がってた。しかし、現在はそのような広がりが見られない。PTA の役割も縮小しており、学校だけに頼るのでなく、地域や誰でも参加できる形で文化活動を始めるチームづくりが必要。

・また、今日の会場には若いお母さんたちの世代の参加が少なく、年齢層が高い方々に偏っている現状がある。この世代がいなくなれば、文化は衰退してしまう危機感がある。過去の文化的背景を持つ人々が減少する中で、今こそ新しい取り組みが必要。私自身も、まだやるべきことがあると感じている。皆さんから力をいただき、地域で文化活動を進める決意を新たにしたところ。ありがとうございました。

5 参加者アンケートより(抜粋)

●シンポジウムに関するもの

・森本さんのお話、とても考えさせられる内容で興味深く聞きました。イベントではなく、こどもたちが自らの足でアクセスできるエリア内で文化体験できることの重要性を感じた次第です。文化芸術というと特別なことのように思えますが、日常生活の遊びや何気ない会話の中から築いているものなのだということに気づきました。私たちはいつから家族団欒、お手伝いの習慣、遊び、しなくなったのだろう？と思い返してみたり、遊びを知らないこどもたちが大人になったとき果たしてどんな事になるのだろうと想像してみたりもしました。放ったらかしでこどもたちが人目を気にせず、思い思いに過ごせるような場所、SOS を発信しやすくなる空気、そういう街が形成されていくと大人もこどもも豊かな日々を過ごすことができ、自殺なんてことを考えなくなるのでは、と思います。

・ゲストスピーチだけ聴きました（時間がとれず…）ケの日、日常の大切なイベントでなくていい、潤いが文化活動のだいご味、基盤になるという指摘が新鮮でした。自分もできることがありそうと思いました。こどもの文化環境を豊かに、の大命題に対しふつうの人ができることがたくさんあると発見できたスピーチでした。

・森本さんのエネルギーッシュな話はきいていて大変心にひびいた。新たなことを知ることはエネルギーになるということは、これからこどもに求められることだと思う。

・あそびやお手伝い、家族団欒の時間がなくなっている、だるまさんがころんだができないという話は衝撃でした。

・森本さんのお話、草の根的な活動とても参考になりました。そして齋藤さんのような方をどんどん前に出てきてほしいですね。

・未来を担うこどもたちとアートの接点を開いていくことは、とても重要だと思っています。多様な団体が連携してこどもたちの創造力を引き出す仕組みが必要と感じました。

●仙台市における「こどもの文化芸術に親しむ環境（機会・場など）」についてのご意見

・仙台市の説明から、小学5年生と中学1年生の、仙フィル鑑賞会の事業を知りました。障害児者向けの「杜のみやこのふれあいコンサート」と、プログラムとしては完全に分離していますが、どこかで文化の中で、インクルーシブな体験もつくれるのかなと思いました。

・オーケストラに触れあうことができることは、仙台市に在住するこどもの特権です。他市町村では、不可です。今後も続けていただき、次世代につないでください。

・普段なじみのない芸術活動に触れる機会を増やしてもらいたい。特に、伝統芸能など。

・学校や家庭以外で和める場所があることが急務と思う。文化に日常からふれていた世代の話をきける機会をつくってほしい。（今回のようなシンポジウムをふやしてほしい）

●その他（文化施策全体に関するご意見、ご要望）

・市民にとってアートを身近に感じてもらう仕組みが必要だと思います。市内のあちこちで多彩な経験ができるようになってほしいです。

- ・音楽ホールと震災メモリアル拠点の複合施設は本当に必要なのでしょうか？
- ・防災庁の設置に対して国に強くアピールする。メディアテークのような仙台市だけで解決せず各地域の知恵を共有できるサテライト文化商圈のような概念をつくる施設をつくる。
- ・気軽に乳児や幼児が参加できるイベントがあると、親も外に出て誰かとコミュニケーションがとれる機会になると思う。よく私自身も仙台市のイベントに親子で参加しているので、これからもよろしくお願ひします。
- ・小中学校の美術・音楽の授業のあり方を見直して欲しい。現状では学校ごとの格差が大きくなっていると考えます。子どもたちにとっての体験は鑑賞よりも「自分がやる」ことの比重を置くべきかと思います。

以上